

改訂印

改訂  
二月号  
寄物  
二行  
二十三行  
八ポイント

カワト

# 花園の思想

## 花懐の痕

横光利一



丘の先端

日光室

バルコオ

一の花の中で透明な

如輝い

てねた。群は死ねば

骨のやりに突き出て

おた。

肺癆院の方へ

彼は海から登

る坂道を歸つて来た。彼はかゝりして時々妻の

傍から離れ、また妻の顔を見

見ると外を歩ま、る度に妻の顔は

線を描きながら

明確なテンポをとつて

行寄つてわ

出た。練瓦の中から不意に一群の看護婦が崩れ

松屋製





「さやいなら  
「さやいなら

「~~さやいなら~~ さやいなら

退院者の後を追って、彼女達は坂道を白

いマントのやりに駆け降り、彼女

達は薔薇の花壇の中へ来た。を施回すると

、門の廣場で、一輪の花のやいな

「さやいなら  
「さやいなら  
「さやいなら

輪を造った。

日光浴をしるる

新鮮な

芝生の上では、白い患者

達は、成った果實のやりに累累として横

たはつてゐた。は、

~~は、~~

~~は、~~

女の顔を見た。彼女の顔は、花畑に纏

は患者達

の幻想の中を柔く廊下へ来た。長い廊下に流

った部屋、部屋の隅から、絶望に光

窓

松岡翠



*[Handwritten scribbles]*

*[Vertical handwritten scribbles]*

松屋 翠

*[Handwritten scribble]*

青い

*[Handwritten scribble]*

*[Handwritten scribble]*

*[Handwritten scribble]*

*[Handwritten scribble]*

*[Handwritten scribble]*

*[Handwritten scribble]*

*[Handwritten scribble]*

*[Handwritten scribble]*

端整な紐をその横顔の上に浮べてみた。

おるひりやうに、端整な紐をその横顔の上に浮べてみた。

に似へた結婚の夜の美しさを回想して

罪と罰とは何ものなかつた。彼女は處女を彼

彼は妻の顔を寢臺の横から透かしてみた。

花解に纏りついで空気のやうに哀れ

不朗かさを静まつてみる。

彼は妻の病室のドアを開けた。妻の顔は

花解に纏りついで空気のやうに哀れ

不朗かさを静まつてみる。

彼は妻の病室のドアを開けた。妻の顔は

花解に纏りついで空気のやうに哀れ

不朗かさを静まつてみる。

彼は妻の病室のドアを開けた。妻の顔は

一列の

つた眼光

冷たく

*[Handwritten scribbles]*

彼に迫つて来た。

彼はその眼が一ツツの音を立てた

*[Handwritten scribbles]*

刺さるやうに

彼は

*[Handwritten scribbles]*

彼は妻の病室のドアを開けた。妻の顔は

花解に纏りついで空気のやうに哀れ

不朗かさを静まつてみる。

彼は妻の顔を寢臺の横から透かしてみた。

罪と罰とは何ものなかつた。彼女は處女を彼

に似へた結婚の夜の美しさを回想して

おるひりやうに、端整な紐をその横顔の上に浮べてみた。

端整な紐をその横顔の上に浮べてみた。

に似へた結婚の夜の美しさを回想して

罪と罰とは何ものなかつた。彼女は處女を彼

彼は妻の顔を寢臺の横から透かしてみた。

花解に纏りついで空気のやうに哀れ

不朗かさを静まつてみる。

彼は妻の病室のドアを開けた。妻の顔は

花解に纏りついで空気のやうに哀れ

不朗かさを静まつてみる。



80024

二

彼と妻との間には最早や悲しみの時機は過ぎておた。彼は<sup>今迄</sup>醫者から妻の死の宣告を幾度も聞かされたか分らなかつた。その度に彼は<sup>彼の</sup>醫者を變へて見た。彼は最後の努力で力の及ぶ限り死と戦つた。しかし、彼が戦へば戦ふほど、<sup>加へ</sup>彼が醫者を變へれば變へるほど、<sup>加へ</sup>死の宣言は事實と一緒に明克の度を<sup>加へ</sup>た。彼は萎れつた。彼は疲れつた。彼は手を放した。呆然と<sup>た</sup>藏のやりに<sup>た</sup>無の中へ<sup>坐</sup>り、さうして、今は、二人は二人を引き、<sup>は</sup>裂く死の断面を見やうとして、<sup>た</sup>互に暗い顔を見合せ、<sup>た</sup>死か現れでもするかのやりに、<sup>た</sup>彼は<sup>た</sup>食卓の時刻が来ると、<sup>た</sup>黙つて匙にスプーンを挿ひ、<sup>た</sup>妻の腹の中に潜んでゐる死に食物を<sup>た</sup>與へる。

低い聲でさうと妻に訊ねて見た。  
の格 原 梨







改訂 6

明ひるひくひなり。陽ひがひ没ひすひればひ暗ひくな  
 に相違ひない。二人ひにとひつひてひ時間ひはひ最早ひ  
 や愛情ひは伸縮ひせずひ。たひだひ二人ひの眼ひと眼ひの  
 空間ひに明暗ひをひはひへひるひ。太陽ひの光線ひ  
 かつた。それは静ひかなひ。彼ひはひはひ真空ひの  
 やいひは虚無ひであひつた。彼ひはひはひ横ひたは  
 つひてひおひるひ妻ひの顔ひか、その傍ひの  
 薬ひ臺ひや盆ひの線ひやひいひにひ一個ひの静物ひ  
 に見ひえひ始ひめひた。彼ひは二人ひの間ひの空間ひを愛情ひの  
 やいひに美ひしくひするひためひに、花壇ひの中ひからマひー  
 がレットひや籬ひ栗ひをとひつてひ來ひた。その白ひ  
 いマひーがレットひは虚無ひの中ひでほひのかひに妻ひの動ひ  
 かぬ表情ひに笑ひみひをひはひいひへひた。まひるひあひの  
 な籬ひ栗ひ葉ひか壺ひにさひさひさひつてひ微ひ風ひに揺ひらひらひく  
 めくと、妻ひはかひすひかなひ歎ひ聲ひをひ深ひして眺ひめひる  
 た。站ひの四角ひな部屋ひにひ站ひべひらひれひた壺ひや寢ひ  
 臺ひや壁ひや横顔ひや花ひ々ひの静ひまひつた静物ひの中ひから  
 かすかなひ一條ひの歎ひ聲ひがひ沸ひれるひとは線ひの  
 彼ひはひ彼女ひのそひの歎ひ聲ひの美ひしひさをひ聽ひくひためひに、

秘められたやいは

松屋類







夕暮の続き

見ると、  
怒りしげ  
に  
ひこと  
云つた。

~~不意に~~  
不意に  
妻は眼を開けて  
彼を  
見ると、  
怒りしげ  
に  
ひこと  
云つた。

あなたは、私か死んだら、幸福になるわね

。

彼は黙って妻の顔を眺めて、それから自分の  
の寢床へ歸つて、~~蠟燭の火を吹き消し~~  
た。

来る憂鬱に

彼は自分の疲れを慰めるために、彼の眼に  
觸れ、~~触れ~~ 空間の存在物を盡く美しく見  
やうと努力し始めた。それは彼の感情のなく  
なつた虚無の空間へ打ち建てらるべき、~~な~~ 一  
つの生活として、彼に残さず、~~残さず~~ 残るものな  
つた。





彼は彼の寢床を好んだ。寢床は妻の寢室  
 と同じであった。軽症者の静臥す  
 べきベランダにあり、彼が花壇の  
 方を伺いておぼろげに目を  
 醒める度に、妻より月に惚れさせられた。  
 彼は眠る度に、妻より月に惚れさせられた。  
 月は絶えず彼の鼻の上にぶらさ  
 線を描き、放さずかた。彼の視  
 線の海を断る。断面のやい、月夜の  
 下で、花壇の花々は絶えず群生した。蛾のやい  
 に、陣を造つておぼろげに月を眺め、  
 ほの白い花々の先端を縮れ、  
 ながら、女房然と海の方へ  
 さ、いふ夜には、彼はベランダからぬけ  
 出、園丁のやい、花の中を歩き、  
 夜の、花壇の横、  
 芝生に抱かれ、池の中で  
 一本の噴水が月光を散らし、  
 花の周囲

松岡 栗



とに飲水してゐた。それは程かに庭で育つた高貴な家畜の甘み

淑やかなさをもつてゐた。

遠く入江を包んだ二本の

岬は揮毫の花園を抱いた腕のやりに

曲つてゐた。さうして、海は髪の花の毛

のやうに、月に何つて

花壇の上を、浮いてゐた。

水平線は、

眼を閉じた

眼を閉じた

眼を閉じた

眼を閉じた

眼を閉じた

眼を閉じた

眼を閉じた

眼を閉じた

眼を閉じた

眼を閉じた

眼を閉じた

眼を閉じた

眼を閉じた

眼を閉じた

眼を閉じた

眼を閉じた

眼を閉じた

眼を閉じた

眼を閉じた

眼を閉じた







華やかな色彩で

た。

て食欲を増進させ 空気は晴れ渡つた空と海

と山 緑の 色味 の中から湧き上つた。

との三色の 目痛む静けさ 物音とは は 娛樂室か

しんしんと かすかに 時は は 上る

ら 患者の咳と 花壇の中で花弁の上に降

りかかる噴水の音 ぐらひにすざな かった。

さう 思ひやかな して、愛は？ 愛は都會の優れ

た醫院から抜擲された看護婦達の清浄な白衣

の 五月の 微風のやうに流れをなす。

~~かすかに~~ ~~患者の咳と~~ ~~花壇の中で~~ ~~花弁の上に~~ ~~降~~

~~りかかる~~ ~~噴水の音~~ ~~ぐらひに~~ ~~すざな~~ ~~かった。~~

~~さう~~ ~~思ひやかな~~ ~~して~~ ~~愛は？~~ ~~愛は~~ ~~都會の~~ ~~優れ~~

~~た醫院から~~ ~~抜擲された~~ ~~看護婦達の~~ ~~清浄な~~ ~~白衣~~

~~の~~ ~~五月の~~ ~~微風の~~ ~~やうに~~ ~~流れを~~ ~~なす。~~

~~かすかに~~ ~~患者の咳と~~ ~~花壇の中で~~ ~~花弁の上に~~ ~~降~~

~~りかかる~~ ~~噴水の音~~ ~~ぐらひに~~ ~~すざな~~ ~~かった。~~

~~さう~~ ~~思ひやかな~~ ~~して~~ ~~愛は？~~ ~~愛は~~ ~~都會の~~ ~~優れ~~

~~た醫院から~~ ~~抜擲された~~ ~~看護婦達の~~ ~~清浄な~~ ~~白衣~~

~~の~~ ~~五月の~~ ~~微風の~~ ~~やうに~~ ~~流れを~~ ~~なす。~~

~~かすかに~~ ~~患者の咳と~~ ~~花壇の中で~~ ~~花弁の上に~~ ~~降~~

~~りかかる~~ ~~噴水の音~~ ~~ぐらひに~~ ~~すざな~~ ~~かった。~~

~~さう~~ ~~思ひやかな~~ ~~して~~ ~~愛は？~~ ~~愛は~~ ~~都會の~~ ~~優れ~~

~~た醫院から~~ ~~抜擲された~~ ~~看護婦達の~~ ~~清浄な~~ ~~白衣~~

~~の~~ ~~五月の~~ ~~微風の~~ ~~やうに~~ ~~流れを~~ ~~なす。~~

~~かすかに~~ ~~患者の咳と~~ ~~花壇の中で~~ ~~花弁の上に~~ ~~降~~

~~りかかる~~ ~~噴水の音~~ ~~ぐらひに~~ ~~すざな~~ ~~かった。~~

弟木かな

松屋琴



へいある。しかし、この花園では愛戀は毒  
 花に散らして、花の明るさは、若の戀に代りた安  
 らかさを病人に興へるため、  
 花との美しい情趣の中で、華やかな  
 さがめまか微笑のやりに迫るなり、愛戀に  
 落ちないものは石であらう。此のたれりこ  
 この看護婦達は、患者の脈を  
 巧妙な手つきと同様に、微笑と秋波を名優の  
 やりに整頓しなげればならなかつた。しか  
 し、彼女達といへば、大なる乳をもちて  
 彼女達の病室の燈火が一齊  
 に消えて、彼女達の就寢の時間か来ると、彼  
 女達ははそ白い衣を脱が  
 ば、  
 花に散らして、花の明るさは、若の戀に代りた安  
 らかさを病人に興へるため、  
 花との美しい情趣の中で、華やかな  
 さがめまか微笑のやりに迫るなり、愛戀に  
 落ちないものは石であらう。此のたれりこ  
 この看護婦達は、患者の脈を  
 巧妙な手つきと同様に、微笑と秋波を名優の  
 やりに整頓しなげればならなかつた。しか  
 し、彼女達といへば、大なる乳をもちて  
 彼女達の病室の燈火が一齊  
 に消えて、彼女達の就寢の時間か来ると、彼  
 女達ははそ白い衣を脱が  
 ば、

松屋製











改訂

15

改訂

間もなく

頂

腐敗した肺臓を恐れる心臓は、

の花園を苦しめ出した。彼らは花園に

接近した地点を撰ぶと、その腐敗し

た肺臓のため、貴水珠つて腐り出した魚を

肥料として積み上げた。忽ち蠅は群生して花

壇や麻舎の中を飛び廻つた。麻舎には、一尺

の蠅は一挺のピストルを等しく恐怖すへき敵

であつた。院内の窓と云ふ窓には金網が

張られ出した。金網の存在は三日間患者達の

安静を妨害した。一日の混乱は半ヶ月の静

養を破壊した。患者達の体温表は狂ひ出した。

しかし、此の肺臓と心臓との戦ひはまだ

續いた。既に金網をもつて防靴を水たことを

知つた心臓は、風上から葉葉を煙べ

て肺臓をめぐらして吹き流した。煙は

道徳に従ふより、風に従ふ。花

壇の花は終日曇らして曇つて来た。煙は花

壇の上から蠅を這ひ散らした。勢カより







「私達は出来たおけのことをやったのですか」

~~何分~~

何分……

「どうも、いろいろ御迷惑をおかけしまして、

~~これ~~

「これからは、もし御親戚の方々をお呼びなす

「いますなら、一時にじつと来ら小来せんやう

に

「承知しました。」

「長い間で、お疲れでございませう。」

「いや。」

「彼はいつの間にか廊下の真中まで来て、ひ

「とり立ち、~~つておれ~~ 忘れぬねえ

「悲しみの強烈な匂ひのやうに、~~龍~~ 来て来た。」

~~龍~~

「彼は妻の病室の方へ歩き出した。」

「しかし、これは、事実であらうか。」

「彼はまた立ち停った。セロの ~~相~~ ~~ボット~~

「日光室から聞えて来た。」

「しかし、よし辟言へ、明かに、事實は妻

「を死の中へ引き摺り込まふとしてゐるし



果して

てか、事實は常に事實であらうか。

— 嘘だ。と彼は思った。

彼は、總ての自分の感覺を錯覺だと考へた。

。一切の現象を假象だと考へた。

— 何故にわれわれは不幸を不幸と感じ

なければならぬのであらう。

— 何故にわれわれは、葬禮を婚禮と感

ては、~~い~~いのであらう。

彼は、いけはあまりに苦しき過かた。彼はあま

りに惡運を引き過かた。彼はあまりに悲しみ

過かた。か故に彼はそのもろもろの苦しきと

悲しきとを、最早や偽りの事實としてみたく

てあらなかつた。

— 間もなく、妻は健康になるらう。

— 間もなく、二人は幸福になるらう。

彼は、このときから、<sup>突然</sup>新しい意志を創

出した。彼はその一個の意志で、總ゆる心り暗さ

を明るさに感覺しやうと努力し始めた。

彼は深い呼吸をすると快活に妻のベッドの

傍へ寄つていった。

もう彼も  
とって長  
い間の産  
無は、  
一瞬後  
の

吹き痛んぬ。



彼は笑ひ出した。

「おい、お前は死ぬことを考へておるんぢら

い。妻は彼を見て鎖いた。だが、人間は死ぬものぢやないんぢ。死ん

だつて、死ぬんてことは、何んでもない。人間は、  
無論、何をあつておるのか彼にも分らなかつた。

分つたね。妻は冷たい目で彼を見詰めた。黙つてお

た。お前は俺より、そんなことは良く知つて

おるんぢら。人間は死ぬものぢやない、何んでか

死ぬんて云ふことは、下らない、何んでか、  
ない、馬鹿馬鹿しいことぢやない。と妻は云つた。

「あ、あ、あ、さうだ。甚しおなんて、馬鹿な話  
ぢやない。しかし、生きておるからつて、お前は俺に気がおする

必要は少しもないんぢ。あたし、あなたより、早く死ぬから、嬉し

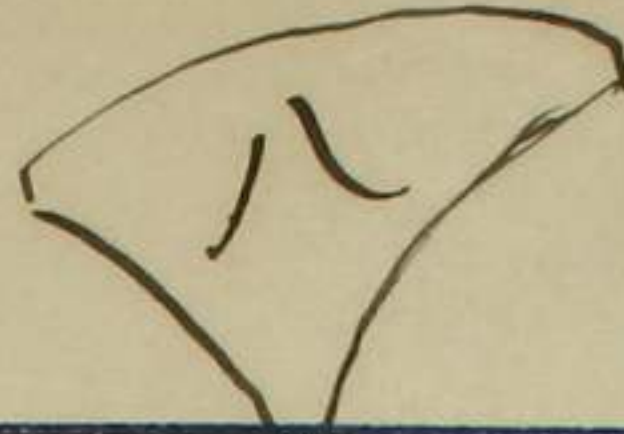
い。お前も、いいことを云やがるぢ。あたしより、あなたの方が、可哀想

松原製









彼の顔から彼の心理の變化を見届けやうとするやうに、  
 妻は黙つて彼の顔を見詰めてゐる。  
 お前は何か淋しいか。  
 お前のお母さんと呼んでやらうか。  
 もういいい。あたし、誰にも逢ひたかない。  
 あなたが傍におて下されば、  
 さうか、ちや、と彼は云つた。  
 直ぐ彼女の母に手紙を書いた。  
 その日から、妻の顔は、急に水々し  
 い。水蜜のやうな爽やかさ加へて  
 絶えず、窓いっぱい傾  
 山腹の百合の花を眺めてゐる。彼は部屋の壁  
 面に新しい花を差しへた。シ  
 ク、彼女の代りにラメツと百合の花  
 オトロオと矢車草。シネラリヤとヒアシン  
 ス。薔薇とマーガレットと雛栗と。  
 お前の顔は、どうしてさう美しくなつたの  
 だらう。お前は十六の娘のやうだ。お前は  
 ぱいのスープロも飲まぬくせに、まるで鶏  
 の十五六羽もやつつけたやうな顔をしてゐる  
 不思議な奴だ。さては、こつたりやつたと

俺の知らぬ間に

花屋票



見えるな。あ、あの百合の花を、  
 坂の部屋から出して。と  
 事は云った。  
 百合の白いは他の花の匂ひを殺してさ  
 さうだ、坂の花は、英雄だ。  
 坂は百合を攫ふと、  
 へ崎と出した  
 と、  
 の濡れたやい、  
 生々生々  
 花粉の精悍な色のために、  
 捨てるが、  
 なくなつた。  
 小猫を下げるやうに花  
 束をさげたまま、  
 いろ、  
 廊下を回って看  
 護婦の部屋を覗いた。  
 壁に狭まれば、  
 空虚の  
 の、  
 部屋の中には、  
 しどけお帯や野  
 蠻なか、  
 じか蒸した  
 空気の中に、  
 轉けてお  
 ね、  
 疲れた身体を横  
 たへるであらう、  
 看護  
 婦達に、  
 山野の  
 清烈な幻想を振  
 り撒き、  
 いてや  
 ら、  
 百合の花束を、  
 匂ひの  
 やい、  
 洗めてをり、  
 戻つて来た。

松屋製



山の上のひは、  
 始めた。彼は暇をみて、  
 へつて、  
 彼の目を仰いだ。  
 その火は、いつまで焚くんです？  
 これだけだ。と若者は云ひ、  
 いたる葉を鎌で、示した。  
 その火は、焚かなくあや、  
 いかないわうで、  
 若者は黙つて、  
 僕の家の火は、  
 んです。焚かなくてすませるわ、  
 やめてくれ給へ。  
 彼は若者の答へを待たずに、  
 の方へ降りて、  
 の壯烈な太股が、  
 らは、  
 龍。子供達は砂濱で、  
 裸へる海月を攫んで、  
 ら、  
 鱈と鯛と、  
 飛沫を上げて、  
 海の中へ馳け込ん  
 ぶるぶる、  
 舟か、  
 海の色に

九

下

鱈

松屋







その夜の  
回診のとき  
彼の妻は  
自分の足  
を眺めなが  
ら醫師に  
訊いた。

と全時に、彼女  
にいつかは、  
彼女の苦  
痛な時期  
をより縮め  
んとしてある  
情けある  
醫師でも  
あった。

事實、彼にして、

眼前の魚  
ある勇敢な敵であつた。  
彼の鈍重な雄烈か、  
彼の砲弾のやいば  
無味な意味を含まないから  
急に  
黒々と沈黙してゐる  
彼の目  
果して  
魚場の魚か、花園の花か、そのどちらであらうか  
迷ひ出した。何せなり、彼女が花園におる限り、彼女の苦しい日々は續いて行くにちがひなからうである。

先生、私の足、こんなに腫れて来て、  
いぢ、それは何んでもありません。御心配なさいませぬ。何んでもありませんから。  
水が足に廻り出したのぢやないか。  
もう、駄目だ。と彼は思った。  
醫師者が去ると、彼は電燈を消して、燭臺に火を照けた。  
—さて、何の話をしたものであらう。

と醫師は  
は誤解を  
化したら



彼は ~~顔を~~ <sup>顔を</sup> 眺めておた。 ~~顔を~~ <sup>顔を</sup> 眺めておた。 蠟燭の光りの  
 ままに ~~顔を~~ <sup>顔を</sup> 眺めておた。 ~~顔を~~ <sup>顔を</sup> 眺めておた。 ~~顔を~~ <sup>顔を</sup> 眺めておた。 ~~顔を~~ <sup>顔を</sup> 眺めておた。  
 は初めて妻を見たとき <sup>彼の</sup> 彼女の ~~顔を~~ <sup>顔を</sup> 眺めておた。 ~~顔を~~ <sup>顔を</sup> 眺めておた。 ~~顔を~~ <sup>顔を</sup> 眺めておた。  
 思ひ出した。 彼は涙かきながら来た。 ~~顔を~~ <sup>顔を</sup> 眺めておた。 ~~顔を~~ <sup>顔を</sup> 眺めておた。 ~~顔を~~ <sup>顔を</sup> 眺めておた。  
 ツと妻の上へ ~~顔を~~ <sup>顔を</sup> 眺めておた。 ~~顔を~~ <sup>顔を</sup> 眺めておた。 ~~顔を~~ <sup>顔を</sup> 眺めておた。 ~~顔を~~ <sup>顔を</sup> 眺めておた。  
 接吻した。 ~~顔を~~ <sup>顔を</sup> 眺めておた。 ~~顔を~~ <sup>顔を</sup> 眺めておた。 ~~顔を~~ <sup>顔を</sup> 眺めておた。 ~~顔を~~ <sup>顔を</sup> 眺めておた。  
 お前は、俺が紙屑の中に坐つておる頃、毎  
 夜こつそり ~~顔を~~ <sup>顔を</sup> 眺めておた。 ~~顔を~~ <sup>顔を</sup> 眺めておた。 ~~顔を~~ <sup>顔を</sup> 眺めておた。 ~~顔を~~ <sup>顔を</sup> 眺めておた。  
 妻は黙つて鎖いた。 ~~顔を~~ <sup>顔を</sup> 眺めておた。 ~~顔を~~ <sup>顔を</sup> 眺めておた。 ~~顔を~~ <sup>顔を</sup> 眺めておた。 ~~顔を~~ <sup>顔を</sup> 眺めておた。  
 俺はあの頃か、一番面白かつた。 お前のお  
 下の頭か、あの ~~顔を~~ <sup>顔を</sup> 眺めておた。 ~~顔を~~ <sup>顔を</sup> 眺めておた。 ~~顔を~~ <sup>顔を</sup> 眺めておた。 ~~顔を~~ <sup>顔を</sup> 眺めておた。  
 ひよつこり ~~顔を~~ <sup>顔を</sup> 眺めておた。 ~~顔を~~ <sup>顔を</sup> 眺めておた。 ~~顔を~~ <sup>顔を</sup> 眺めておた。 ~~顔を~~ <sup>顔を</sup> 眺めておた。  
 り憂鬱がなくなつた。 ~~顔を~~ <sup>顔を</sup> 眺めておた。 ~~顔を~~ <sup>顔を</sup> 眺めておた。 ~~顔を~~ <sup>顔を</sup> 眺めておた。 ~~顔を~~ <sup>顔を</sup> 眺めておた。  
 つた ~~顔を~~ <sup>顔を</sup> 眺めておた。 ~~顔を~~ <sup>顔を</sup> 眺めておた。 ~~顔を~~ <sup>顔を</sup> 眺めておた。 ~~顔を~~ <sup>顔を</sup> 眺めておた。  
 も真実して ~~顔を~~ <sup>顔を</sup> 眺めておた。 ~~顔を~~ <sup>顔を</sup> 眺めておた。 ~~顔を~~ <sup>顔を</sup> 眺めておた。 ~~顔を~~ <sup>顔を</sup> 眺めておた。  
 からは、俺もお前も、若い ~~顔を~~ <sup>顔を</sup> 眺めておた。 ~~顔を~~ <sup>顔を</sup> 眺めておた。 ~~顔を~~ <sup>顔を</sup> 眺めておた。 ~~顔を~~ <sup>顔を</sup> 眺めておた。  
 まア、いいさ。 ~~顔を~~ <sup>顔を</sup> 眺めておた。 ~~顔を~~ <sup>顔を</sup> 眺めておた。 ~~顔を~~ <sup>顔を</sup> 眺めておた。 ~~顔を~~ <sup>顔を</sup> 眺めておた。  
 けれど、 ~~顔を~~ <sup>顔を</sup> 眺めておた。 ~~顔を~~ <sup>顔を</sup> 眺めておた。 ~~顔を~~ <sup>顔を</sup> 眺めておた。 ~~顔を~~ <sup>顔を</sup> 眺めておた。  
 俺だつてお前に一度もすまぬやいなことは  
 して来てないし、お前も俺にあやまるやいな

妻の影が ~~顔を~~ <sup>顔を</sup> 眺めておた。 ~~顔を~~ <sup>顔を</sup> 眺めておた。 ~~顔を~~ <sup>顔を</sup> 眺めておた。 ~~顔を~~ <sup>顔を</sup> 眺めておた。

ヘリオトロオの

松屋製







給へ。

を引きあしつて

彼は一握の櫻首さくらのかぶ頬の涙を拭きとつ

鴉が奇怪な飛とび花壇の上を鏡い影のやうに

カーブを描きまなまな花壇の上を鏡い影のやうに

彼は心の鎮むまじ幾回となく静かな噴水の周囲

を運は悲しみのやうに廻まわつておた。

彼は心の鎮むまじ幾回となく静かな噴水の周囲

を運は悲しみのやうに廻まわつておた。

彼は心の鎮むまじ幾回となく静かな噴水の周囲

を運は悲しみのやうに廻まわつておた。

彼は心の鎮むまじ幾回となく静かな噴水の周囲

を運は悲しみのやうに廻まわつておた。

彼は心の鎮むまじ幾回となく静かな噴水の周囲

を運は悲しみのやうに廻まわつておた。

彼は心の鎮むまじ幾回となく静かな噴水の周囲

を運は悲しみのやうに廻まわつておた。

彼は心の鎮むまじ幾回となく静かな噴水の周囲

を運は悲しみのやうに廻まわつておた。

彼は心の鎮むまじ幾回となく静かな噴水の周囲

を運は悲しみのやうに廻まわつておた。











め込もいとしてゐるんら。  
 彼には何も分らなかつた。 彼は彼を  
 おる ~~動~~ ハルコオン 動かぬ露臺か、 彼は彼を  
 お時間の上 疾走しつゝあ 了のを 乗せて  
 感じた。 すかになかつた。  
~~彼は~~ ~~水平線へ~~ ~~半~~ ~~円~~ ~~を~~ ~~沈~~ ~~め~~ ~~て~~ ~~行~~ ~~く~~ ~~大~~ ~~陽~~  
~~の~~ ~~速~~ ~~力~~ ~~を~~ ~~あ~~ ~~れ~~ ~~か~~ ~~妻~~ ~~の~~ ~~生~~ ~~命~~ ~~を~~ ~~擦~~ ~~り~~ ~~減~~ ~~ら~~ ~~し~~ ~~て~~  
~~お~~ ~~る~~ ~~速~~ ~~力~~ ~~が~~ ~~と~~ ~~彼~~ ~~は~~ ~~思~~ ~~つ~~ ~~た~~。  
 見る間に ~~大~~ ~~陽~~ ~~は~~ ~~ぶ~~ ~~ぶ~~ ~~ぶ~~ ~~ぶ~~  
 慄へながら水平線に食はれいつた。海面は  
 血を流した姐の 身を潜めて 静まつて  
 した。 鳥のやい 空に糸のやい 音のやい  
 感じた。 不意に 空に糸のやい 音のやい  
 つた。 向ふの廊下から妻の母が 降 り て い た。  
松屋

その上で

落された

空に糸のやい

音のやい







すると、  
 妻は、  
 揺れる、  
 な微笑を  
 浮かべて彼に  
 云った。

33.

あたし、さつき、あなたを呼んだの。  
 ああ、あれは、お前だつたのか。俺は  
 バルゴオ、胸が、おかしくなつた  
 ン。あなた、あなたの身体を、ちよっと上  
 へ持ち上げて。何んだか、谷の底へ落ちてい  
 くや、は気がするの。  
~~彼は両手の上へ~~  
~~乗せ~~  
~~た。~~  
 お前を抱いてや、  
 彼の妻を静に、  
 何んと、お前は、  
 軽く、奴が、  
 だ、こりや花束だ。  
 だ、  
 ちむらつ太のね、もうこれで、  
 俺も、これで安心した。  
 お前は、夕べから、ちつとも眠ておな  
 い。

あたし、  
 安心

軽、奴が

久し振

て、  
 へんに

と妻は云った。







妻 ~~が~~ 目を ~~閉~~ じ ~~た~~。彼は ~~も~~ 明りを消して窓  
 を開けた。樹の揺れる音が風のやりに聞え  
 て来た。月のない ~~暗い~~ 花園の中を一人の年とつた看  
 護婦が憂鬱に歩いてゐた。彼は身も心も某女に  
 てゐた。妻の母はベランダの窓硝子に頬を  
 て ~~ま~~ ま ~~ま~~ 花園の中を眺めてゐた。——もし何  
 の成算も消え失せて了つたやうに。 ~~花の~~ ~~枝~~ ~~が~~ ~~揺~~ ~~れ~~ ~~る~~ ~~音~~ ~~が~~ ~~遠~~ ~~く~~ ~~の~~ ~~病~~ ~~舎~~ ~~の~~ ~~上~~ ~~に~~ ~~揺~~ ~~ら~~ ~~れ~~ ~~て~~ ~~い~~ ~~た~~。  
 カーテン ~~の~~ ~~上~~ ~~に~~ ~~揺~~ ~~ら~~ ~~れ~~ ~~て~~ ~~い~~ ~~た~~。 ~~遠~~ ~~く~~ ~~の~~ ~~病~~ ~~舎~~ ~~の~~ ~~上~~ ~~に~~ ~~揺~~ ~~ら~~ ~~れ~~ ~~て~~ ~~い~~ ~~た~~。  
 た。時及せ花壇の花の先端が、闇の中を探る無  
 数の青がめた手のやりに揺らめいた。  
 満潮 ~~の~~ ~~夜~~ ~~に~~ ~~は~~ ~~十~~ ~~三~~ ~~時~~ ~~に~~ ~~満~~ ~~潮~~ ~~が~~ ~~来~~ ~~た~~。 ~~満~~ ~~潮~~ ~~の~~ ~~夜~~ ~~に~~ ~~は~~ ~~十~~ ~~三~~ ~~時~~ ~~に~~ ~~満~~ ~~潮~~ ~~が~~ ~~来~~ ~~た~~。  
 この夜に彼の妻は激しく苦し ~~み~~ ~~出~~ ~~し~~ ~~た~~。 ~~激~~ ~~しく~~ ~~苦~~ ~~し~~ ~~み~~ ~~出~~ ~~し~~ ~~た~~。  
 来た。カンフルと食塩とリンゲルが交代に彼  
 女の体成に火を黙けた。しかし、 ~~後~~ ~~に~~ ~~酸~~ ~~素~~ ~~吸~~ ~~入~~ ~~器~~ ~~が~~ ~~け~~ ~~ら~~ ~~れ~~ ~~た~~。 ~~後~~ ~~に~~ ~~酸~~ ~~素~~ ~~吸~~ ~~入~~ ~~器~~ ~~が~~ ~~け~~ ~~ら~~ ~~れ~~ ~~た~~。  
~~彼は~~ ~~昨日~~ ~~の~~ ~~彼女~~ ~~が~~ ~~死~~ ~~の~~ ~~活~~ ~~動~~ ~~を~~ ~~し~~ ~~始~~ ~~め~~ ~~た~~。 ~~彼は~~ ~~昨日~~ ~~の~~ ~~彼女~~ ~~が~~ ~~死~~ ~~の~~ ~~活~~ ~~動~~ ~~を~~ ~~し~~ ~~始~~ ~~め~~ ~~た~~。  
 彼の女の枕元で、ぶくぶく泡を立てたから必  
 死の活 ~~動~~ ~~を~~ ~~し~~ ~~始~~ ~~め~~ ~~た~~。 ~~死~~ ~~の~~ ~~活~~ ~~動~~ ~~を~~ ~~し~~ ~~始~~ ~~め~~ ~~た~~。

松屋製



△今  
は  
彼の  
生命を  
縮め  
海軍の  
魚心に  
意を  
持  
ち  
な  
す

彼は妻の上へ蔽ひ耐さるやうにして吸入  
器の口を妻の口へあてておた。――逃かし  
はせぬぞ。と云ふかのやうに。妻の母は娘の  
苦しむ一息ごとに、顔を覗きめ、一緒に息を吐  
き出した。彼は時々吸入器の口を妻の口の  
上から脱して片た。すると、彼女は絶えかえ  
な呼吸を苦しんだ。  
――いよいよだ。と彼は思った。  
もし吸入が永久に  
、彼は永久に持ち續けて  
かつた。だが吸入がら彼女の苦しみを  
續け、  
眼前の事實のやうに  
彼は生命を引き止め  
法醫學子に從つて、  
一本の注射を打たせと云ひ  
た。だが、  
生き残つてゐる力のためのみ  
に。  
彼は先に法醫學の言葉を述べた。  
いせ、いせ、と彼の妻は  
よしよし、と打  
つのは止まらう。

あや、  
もー  
つのは止まらう。

松原 聖



彼は暴風の  
や眼かくら  
んが。

37

あな、もうあたし、駄目な  
 妻は云った。  
 いや、まだ、大丈夫だ。  
 あたし、苦しい。  
 どうして、あたしを、死なしてくれないん  
 だらう。 ~~妻は云った。~~  
~~そんなことば、云ふんやない。~~  
 こんなに苦しいのに、まだあたしを、苦  
 しめる ~~か~~ つもりかしら。  
 今は、彼は ~~は~~ 彼女の死を希ふ意志が怒めしかなかった。  
 もう、ちよつとの辛抱さ。直さ苦しくなくな  
 るよ。  
 あ、もう、あなたの顔が見えなくなつた。  
~~妻~~ は部屋の中を見廻しなから、手を出し  
 た。 ~~彼の~~ 彼の方へ ~~手~~  
 ●彼は激しい愛情を二本の手の中に殺到させ  
 た。  
 しつかりしろ。ここに ~~に~~ におるぞ。  
 うん。と彼女は ~~う~~ た。  
 彼女の把握力か、生涯の力を籠めて彼の手

彼女の

彼の方へ

と妻は云った。

んだから



母の中へ入り込んで来た。

「あなた、あたし、もう死んでよ。」と妻は云った。

「もうちよつと、待てないか。」と彼は云った。

「あたし、苦しいの。あなたより、さきに死

んで、済まないわね。

彼は答への代りに、聲を上げて泣き出した。

「あなた、長い間、ほんとうに済まなかつたわ

御免してね。」と妻は云った。

「俺も、お前に長い間世話を焼いて、すまな

かつたよ。」と彼は云った。

妻は頷をひいてしつかりと頷いた。

「あたしは、ひとりぼつちには、なかつたわ。

あなたも、ひとりぼつちには、なつたわね。

あたしは、死んだら、もうあなたのことをする

ものか、誰もおなくなるとわ。

萎れたマリーガレットの花の傍かり、彼女の

母の泣き聲が、勸告のやうに起つた。

「キーボ、キーボ。」

「お母さんにも、すまなかつたわね。勘忍し

てね。兄さんにも、すまなかつたわ。それから

しく



皆の人にも、~~宜しく~~  
 ああ、ああ、心配しないでいいよ。もし直  
 ぐ、皆の者が、やつて来るよ。と母は云つた。  
 ああ、まだ、待たなくちゃ。ならないか  
 しら。苦しんだけど。  
 もし直ぐだよ。さつと電話をかけたんだか  
 らね。もし直ぐなんだから。  
 ああ、さあ、死ねわ。もし、苦しくつ  
 て、  
 よしよし、安心してくればいい。何も心配  
~~しなくて~~なくていい。と彼は云つた。  
 妻は鎖くと眼を大きく開いたまま部屋の中  
 を見廻した。一羽の鴉が彼と母とを  
 啜り泣く聲に交へて花園の上で啼き始めた  
 。すると、彼の妻は親しげな愛撫の微笑を洩  
 したから咳いた。  
 夕方、鴉の早い鴉ね。もし啼いて。  
 彼は、妻の、天晴れ美事な心境に呆然とし  
 て了った。彼はもし涙が出なかつた。  
 さやうなら、と暫くして妻は云つた。

松屋製



「うむ、さやなら」と彼は答へた。  
「キーボ、キーボ」と母は呼んだ。

しかし、彼女はもう答へなかつた。彼女の  
呼吸は、たゞ大きく吐き出す息ばかりにな

つて来た。彼女の把握力は、刻々落として、  
く頸の動きと一緒に、彼の掌の中で木やり

に弛んで来た。彼女は動きとまつた。さうし  
て、終に、死は、鮮麗な曙のやうに、忽ち

して彼女の面上に浮か上つた。  
「これだ。」

彼は暫く、その前には姿を現した死の美  
しさに、~~驚き~~見とれなから、恍惚と

して突き立つておた。と、やがて、彼は一枚  
の紙のやうにふらふらしながら、花園の中へ

降りていった。

「キーボ」  
「キーボ」

彼は垣を越え、丘へ入った。

「キーボ」  
「キーボ」



改訂印

41

42 ✓

松屋

彼は置き去れられぬ子のやうに、どつか  
 と草の上へ尻を落とすと空<sup>くわ</sup>に泣き<sup>な</sup>ぬ  
<sup>し</sup>霊を求め<sup>て</sup>  
 出した。

~~彼は置き去れられぬ子のやうに、どつか  
 と草の上へ尻を落とすと空に泣きぬ  
 し霊を求めて  
 出した。~~

118089